海外就職から起業までの２５年間

川村　千秋　さん

（株）プライムビジネスコンサルタンシー　代表取締役
(Founder & Managing Director)
１９８７年　明治大学　政治経済学部卒
英語部ディスカッションセクション　所属

明治大学　時代

入学当時は体育会アーチェリー部に所属しましたが、腕の骨格上、怪我の可能性が高いと判断し、1 年生の 12 月になって ESS に入部しました。

各セクションともに主要なイベントは終了している時期で、唯一、日本女子大とのイベントが残っていたディスカッションセクションに入部しました。しかし、ここで培った情報リサーチの手法、ロジックの組み立て方は、以心伝心が機能しない海外において今も充分役に立っています。

中学 3 年時に 1 ヶ月間の米国ホームステイ、高校 3 年時に 1 年間の米国交換留学を経験していましたが、入部時の英語力は極めて人並み。あがり症でもあり、人前で論理的に話を展開するスキルを身につけるには人一倍苦労した記憶があります。

就職の道

卒業後は航空会社を目指しましたが全敗し、中規模の欧州系銀行の東京支店にようやく就職。それでも海外への夢断ち難く、4 年間で述べ 20 社以上の外資系航空会社に応募しました。

2000 名の応募者から最終選考の 19 名に残りながらも不採用となったルフトハンザ航空を最後に、今度は米国 MBA 留学を目指して 1 年間予備校に通うものの企業派遣以外の道は奨学金に頼る他なく、当時は応募条件に『30 歳未満の男性に限る』などと明記されていた時代でした。しかし、土日を返上して TOEFL や GMAT の予備校で必死に勉強した一年間は、これも時を経て無駄にならなかったと実感しています。

海外での就職を求める

次なる手は海外就職。時は 1990 年代。

これからはアジアの時代だと考え、英語で仕事ができる香港かシンガポールかで迷いながらも中国返還前の香港より独立国家であり英語が公用語であるシンガポールを選びました。インターネットのない時代でしたから情報や人脈は足で探すしかなく、1 年半の間に週末の弾丸旅行も含めて９回渡航。

1996 年のゴールデンウィークに集中して面接を受け、日本の都銀のシンガポール支店とシンガポールに世界本社を置くフランス人医師が設立したインターナショナル SOS 社から内定をいただきました。

駐在員と現地採用との待遇格差があった日本企業より、本社採用で昇進に限界のないインターナショナル SOS 社のマーケティング職を選んで入社。同社は今では世界で 1 万人以上の従業員を抱える緊急医療・危機管理サービスのトップ企業に成長しています。

この会社では日本を含む 11 カ国のマーケティングを担当し、北米、欧州も含めて月の半分は海外出張という日々を送りました。日本は重要な市場ではあったものの、日本人であることで有利になることは一切なく、本社だけでも 20 カ国以上からの社員がいますから日本の顧客以外とのコミュニケーションは全て英語。大学卒業時には多少なりとも英語が使えると自負していましたが、木っ端微塵に砕かれました。

海外の仕事を求め、転職

その後、日本支社への転勤辞令があり、シンガポールで働き続けたかったことを理由に辞退。数ヶ月前にお誘いをいただいていたヘッドハンティング専門会社に転職しました。ここもシンガポールが本社であり、香港、タイの日系企業も担当したため、やはり出張の多い日々でした。

2 年後、日本支社を立ち上げることになり、その立ち上げ部隊として 3 年間駐在員という形で東京に勤務。その直前にシンガポール共和国永住権を取得しました。国際結婚で永住権を取得される方は多いですが、私のように独身で申請した例は珍しかったと思います。

規定の申請書類だけでなく、『いかにこの国に貢献してきたか、今後はどのように貢献をしたいか』を臆面なく堂々とレターでアピール。推薦状は自分で勝手にドラ

フトして上司にサインを貰いに行きました。このあたりになると、あがり症の自分は何処へ、何の後ろ盾もない中、海外で生き抜いていくにはこのぐらいの図々しさがなければと思うようになっていました。

東京駐在期間の終了が見えてきた頃、上司からバンコクの立ち上げに 3 年から 5 年の期間で行って欲しいとの打診がありました。

永住権取得直後に東京転勤したためシンガポールでの居住期間にブランクが生じており、このままバンコクに行けば永住権剥奪となる可能性もあったので辞退して退職。競業規定の制限があったので 1 年間は東京の外資系コンサル会社の契約社員として働き、ひとつプロジェクトを仕上げると 2 週間ほど海外に出掛けました。

シンガポールにて、独立起業

2008 年にシンガポールにて独立起業。

最初はヘッドハンティングを中心とした人材紹介をしていましたが、その後、進出する日本企業から人材以外でもサポートして欲しいとの依頼を受け、今は法人設立手続き、政府機関とのネットワーキング（シンガポールは進出する外資への受け入れ体制が整っている）、英語によるビジネスプランの作成から資金調達まで包括的な支援をしています。

既に大手企業は進出済みなので対象となるのは中小企業やベンチャー企業です。

今年でシンガポール生活も 25 年となり、現地で就業した経験、ヘッドハンター時代に築いたシンガポール人、欧米人ビジネスマン人脈、政府諸機関や政府系ファンド、エンジェル投資家などとのネットワークなど全てがビジネス上の資産になっています。

10 年ほど前から日本の高校生、大学生の海外研修講師の仕事もいただくようになり、Covid-19 で渡航制限のあったこの半年間にも北海道大学、早稲田大学へのオンライン研修講師をさせていただきました。私自身は 20 代の頃とライフスタイルが変わっていませんが、いつしか、結婚していたら自分の子供ぐらいの年齢の学生さん相手に話をする年齢となりました。

そうした方々と話していると起業に憧れる方にも出会いますが、決して楽な道ではありません。固定給も有給休暇も一切なく、自分の食い扶持を確保しながら事業を拡張していく、それも家族や組織の後ろ盾もない外国でそれをしていくことは決して甘くはありません。

とは申しても、起業してあっという間に 10 年以上が経ち、なんとか暮らしていけているということは自分に合っていたのかもしれません。判断力と行動力、そしてストレスに打ち勝つ程度の鈍感さがあれば充分なのだと思います。

明治大学英語部　現役生の皆さんへ

現役生の皆様、私の大学時代と異なり海外は身近な存在となりました。現実的に申せばやはり英語は基本です。どのセクションの活動でも『伝える』ことへの熱意が根本にあると思います。自分の考えを持つことがまず基本、次は伝達手段としての英語です。日本においてアウトプットの機会を得ることは容易ではありませんが、それがESS ではできるのです。日本人同士が英語で喋っていても変な顔をされないのがESS なのです。ESS 活動の中ではどうぞ英語漬けになってください。そして機会を『創って』短期間でも良いので海外に出てみてください。英語に関する皆様の自信はそこで一旦クラッシュされるでしょう。そこからが本番です。

私は客室乗務員になって 5 年後には結婚退職するという夢を描いて卒業しました。しかし、なぜか今、シンガポールで起業し 25 年も独身生活を送っています。人生とはそんなものですし、それを幸せだと感じています。就職活動などについて具体的にコメントするにも、私自身、ロールモデルというものを求めずに生きてまいりました。どんなに紆余曲折、破天荒な人生であっても、いつしか時代が自分に追いつくだろう、ぐらいに構えて自由に生きてください。

今の自分の基礎を築いてくれたESS、ディスセクの先輩、後輩、同期に感謝しています。

勤務先：Prime Business Consultancy www.prime-business.biz